

一日こそ 人も待ちよき 長き日を かくし待たえば

ありかつましじ

難波天皇妹 (巻四・四八四)

いと女性に思われている側面が強く描かれます。『万葉集』には仁徳天皇が詠んだときれの歌は載っておらず、歌の中で待たれる存在としてのみ現れます。

『万葉集』の中で恋の歌は数多く、主流をなすといえます。今回の歌は恋の歌(相聞)ばかりを収めた巻四の冒頭を飾る一首です。女性の立場から、男性を待つ苦しさが歌われています。

この歌には「難波天皇の妹の大和に在す皇兄に奉られる御歌一首」という題詞があり、

「難波天皇」を仁徳天皇とみる説と、孝徳天皇とみる説とがあります。ただ孝徳天皇の妹という存在は史書類にも伝わっておらず、『万葉集』の巻二の相聞の最初にも仁徳天皇が詠まれることから、今回の歌も同様の伝誦歌と理解するのが自然なようです。

この歌じたい、巻二

やまと
万葉がたり

巻頭4首(八五〇八八)と発想が似ています。仁徳天皇皇后・イワノヒメが天皇を思って作った歌「君が行き日長くなりぬ(八五)」ばかり恋ひつつあらずは(八六)「ありつつも君をば待たむ(八七)」でも、長く逢えない中、苦しくも待っていることを歌います。今回の歌はこの一連の作に入

っていてもなじむのではないかと思うほどです。「長き日」と読みたくなりませんが、単数の日は「ヒ」と言い、複数の日は「ケ」と言っていました。現在も二日などの「カ」に名残をとどめています。

さて、題詞の「難波天皇」を仁徳天皇とすると、「難波天皇の妹」は八田皇女(八田若郎女)にあたると見られます。「古事記」には、仁徳天皇から女性たちへの歌も載っています。仁徳天皇は巨大な古墳や「聖帝」としての伝え、古事記下巻の最初を担うことなどでも知られますが、女性に思われる天皇像があったのかもしれない。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

【訳】一日くらいなら、誰だつて待つのは楽でしょう。長い日々をこんな風に待つのは、耐えられないことです。

春されば まづ咲くやどの 梅の花

独り見つつや 春日暮らさむ

山上憶良(巻五・八一八)

梅の花が咲く頃になりました。元号「令和」の元となったことでもおなじみの梅花の宴が行われたのはちょうど今ごろの時期にあたり
成す「ように発せられ

ます。「園梅」とは旅人の邸宅の庭の梅のこととで、「短詠」は短歌を詠むことです。今回の歌はその場で詠まれた32首の4番目、山上憶良の作です。左注に「筑前守山上大夫」とあり、今でいう福岡県知事のような立場にありました。有名な長歌「貧窮問答歌」

やまと
万葉がたり

(巻五・八九二〜八九三)はこの数年後に作られたと考えられています。さて、今回掲載の歌は宴でのほかの歌とは少し雰囲気異なります。宴会で梅を詠むのですから、梅をほめるような楽しい歌が主流ですが、憶良は「独り」を歌います。「見つつや」の

「や」が反語なので、独りで見ながら春日をすくことなどしようか、いやするまい、という否定になります。ここで「独り」を詠みこんだのは、宴の主人である大伴旅人が大宰府で妻を亡くした

境を思いやっていたことと解釈されています。旅人が妻を亡くした際、憶良は旅人になりかわって長歌と反歌5首(「日本挽歌」巻五・七九四〜七九九)も梅に春の訪れを実感します。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

【訳】春になると最初に咲くわが家の梅の花、私一人で見つつ一日をすくことなど、どうしてしようか。